

## 〔課題演習抄録〕

# 中学校社会科学習における動機づけ方策の研究 ーARCS モデルを援用してー

大 坪 明 寛  
Akihiro OTSUBO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：学習意欲，ARCS モデル，動機づけ方策チェックリスト

## 1 研究の目的

本研究は，中学校社会科授業において，より効果的な動機づけによって学習者が意欲的に社会科学習に取り組む授業実践と分析を通して，「学習への動機づけ方策チェックリスト（社会科版）」を作成する手がかりを得るものである。

## 2 研究の計画

平成 30 年 4～9 月	先行研究分析
同 10 月	授業構想，チェックリスト分析
同 11 月	実践，CIS，文字起こし
同 12 月	授業分析，CIS の分析
平成 31 年 1 月	チェックリスト作成

## 3 研究の内容

### (1) 先行研究

Keller (1983) は動機づけに関連する概念を 4 つに分類し，それぞれの頭文字をとった ARCS モデルを創出した。ARCS の A は「注意 (Attention)」であり，学習者の関心を獲得することや学ぶ好奇心を刺激すること，R は「関連性 (Relevance)」であり，学習者の肯定的な態度に作用する個人的ニーズやゴールを満たすこと，C は「自信 (Confidence)」であり，学習者が成功できることや成功は自分たちの工夫次第であることを確信・実感するための助けをすること，S は「満足感 (Satisfaction)」であり，内的もしくは外的な報奨によって達成を強化すること，をそれぞれ意味する。これらの分類は，4 つの領域それぞれにおいて意欲を刺激・保持するための方策をつくりだすことを可能にする。その上で，Keller (2010) は，特に「関連性」と「自信」が ARCS モデルの中核であると述べる。

また，「公民としての資質・能力」の育成をめざす社会科において，生徒が「関連性（学ぶ意義）」を感じることは大変重要である。豊畠 (2017) は，生徒にとって身近で切実な課題であり，レリバンス（学ぶ意義）を強く感じる課題設定の必要性を述べ，その方途をパフォーマンス課題とする。

ARCS モデルの 4 つの側面に基づいて作成されたものが，「ARCS モデルの動機づけ方策チェックリスト」（以後，CL と表記）である。ただ，この CL は非常に汎用性が高いものの，社会科を意識して作成されたわけではない。そこで，中学校社会科版の CL が必要であると考えた。

本モデルを援用した先行研究は，管見の限りでは中学校社会科での実践がなく，小学校での実践においては中野 (2015) がある。中野は，小学校社会科版の「ARCS モデルの支援方略」を基に，単元計画に合わせた各時間の支援方略を作成し，検証授業を行った。各時間の分析に関しては「3 名の児童のワークシートの記述」，学習意欲に関する「事前・事後のアンケート」，「ふり返しシートの学級の平均値」により行い，支援方略の効果について考察している。ワークシートの分析では，単元が進むにしたがって児童の社会参画に対する意識の高まりが見てとれるものの，その 3 名を抽出した理由が不明確である。また，「事前・事後のアンケート」においては，有意な差が認められるとするが，これは必然と考えられる。また，「ARCS モデルの支援方略」は，ARCS の下位分類に沿って細かく作られているが，小学校を想定して作成されており，中学校社会科の授業で援用したところで，教科の目標に到達することは，難しいと考える。

これらのことから，中学校社会科授業における CL を作成し，中学校社会科の特性を踏まえた動機づけ方策を見出す必要があると考える。

## (2) 実践授業

福岡県内公立中学校第2学年 25 名を対象に、「関東地方」の単元で実践した。単元の課題として「外国人向けガイドブック（以下、GB と表記）を作ろう」を設定し、以下の4次で構成した。

過程（時間）	内容
1次（1）	単元の説明、グループ分け
2次（2.5）	教科書を基にした調べ学習
3次（2.5）	旅行GBを基にした調べ学習
4次（2）	発表会、質問、交流、反省

1次では、「TOKYO 2020」で訪日外国人観光客が多く集まることが予想されることから、GBを作るものの有効性を示した。2次では、教科書に則した調べ学習を、ジグソー型学習の形式で行った。3次では、教師が準備した東京を中心とする旅行GBを各グループに選択させ、それを基に調べ学習を行った。また、GBを評価する視点の説明も行った。4次では、2、3次で作成したものの発表会を行い、感想用紙に「良かった点」「改善した方がよい点」「気になった点」を書かせ、それを基に様々なグループで交流した。交流の際には、GBをコピーし、とじ合わせたものを1冊ずつ配付した。

## 4 成果と課題

本稿では、単元のまとめである4次の2/2時間目を取り上げ、授業記録と、授業後に実施した「科目の興味度調査（以下、CIS と表記）」に関して、ARCS モデルの各分類と照らし合わせて分析を行った。なおCISは、ARCS モデルの4つの側面に分類できる34の質問項目で構成され、それらを5段階で回答したものを得点化した。

本実践の成果としては、特に授業場面において、ARCS モデルの支援方策「A-2. 探求心の喚起」、「R-2. 動機との一致」の学習動機づけの有効性を見出すことができた。それらに係る生徒の発言が（図1、2）である。

まず、「A-2. 探求心の喚起」に関しては、単元を通して、教師は「よりよいGBとは何か」を生徒に問いかけており、その結果、（図1）に見られるようにGBに掲載する情報の優先順位や、GBの構成を意識した内容の吟味といった、そのグループで考える「よりよいGB」づくりを探究していく態度が形成されたと考える。

次に、「R-2. 動機との一致」については、（図2）

C182.	(Ya) 饅頭やろ。え、饅頭やなかったん？ 逆に
C183.	(Na) え、あれ饅頭って書いてなんかね？ 俺ら
C184.	(Ta) 書いてない。僕さこうと…いや、書いてない。
C185.	(M) 書いたような気がしたっちゃね。
C186.	(Ya) 饅頭言えよよかったね、アドリブで。
C187.	(T) ね
C188.	(Na) ね。(ページをめくる音) ここ。
C189.	(T) でもさ、入らんのかや、
C190.	(Na) あーあー
C191.	(T) これも入れたかったけさ。
C192.	(Na) あーそっかそっかそっか。
C193.	(T) これの導入の部分だけ絶対ないといかんし、
C194.	(Na) うんうん、これはないとね。2枚にわたって書いてもよかったやない？
C195.	だな
C196.	(T) ミスった、うんちよつとミスった。

図1

C213.	(Ya) あー、確かにそうやな。	T53.	(笑い)
C214.	(Na) 色も使えよよかった	T54.	じゃあ、改作んやったら、どういったことをあれする？
C215.	(T) うん。	C226.	『色を使う』
C216.	(Ya) だって、比べたらすごいもん。見てほら！ 色鮮やか！	C227.	(Ya) 写真を使う
C217.	(Na) うん。だって、これみんなうまいよね。	C228.	(Na) 写真を使って、
T52.	どれがどれがどれが？	C229.	(T) 写真写真写真、言われたもん、ぼく
C218.	(Na) これとか、これ	T55.	なんで、なんで色とか写真使ったらいいと？
C219.	(Ya) テーマパーク、テーマパーク！	C230.	『見やすいから』
C220.	(Na) やっぱ女子最盛やない？ 笑	C231.	(T) 分かりやすいです。その方が、なんか、
C221.	(Ya) これこれ、これおれあつーにこれ好きなんよ！	C232.	(Na) なんか、ここにはこういうのがあるんやなーとか、そういうのが分かりやすくして…
C222.	(Na) これこれ、おれ、これも好きやわ	C233.	…
C223.	(Ya) 女子つえーわ！ だって、これあれやもん、女子力高めめやつらが集まるとんばい、Ah、I, Sh, A, I, I, I	C234.	(Na) 別、それやったら、別、何を買えばいいとか入れんでも、その写真を入れとけば、説明が省ける。なるほどね。
C224.	(T) いや、ぼくも女子力高い奴らやる？	T56.	
C225.	(Ya) おおー！ 女子力たけー！！ うおー！！		

図2

のように、他のグループのGBと比較しつつ、気付いたことや、そのメリットを自分たちなりに解釈し、次に生かすための反省点として、捉えることができています。このことから、グループ間の比較によって、学習の目的をさらに明確にしていくことができたと考えます。

CISは、以前の単元「中部地方」と本単元のそれぞれの最後の授業で実施したところ、本単元が「中部地方」実践を、4.75p上回った。特に、ARCSモデルのR（関連性）が2.25p上昇しており、「よりよいGBをつくる」という学習動機が、相手意識（外国の方に楽しんでもらいたい）および学習内容（関東地方の地理的な特性）と有機的な関連性をもつことができたものと考えられる。

その一方で、S（満足感：「本単元での学習内容の習得・活用のために必要な努力量はどうか」）では、0.375p低下しており、全質問中最も低かった。これは、知識の習得に関して、従来の教師主導（教師が教える形式）からグループワーク（自分たちで学ぶ形式）にしたことにより、生徒が知識の習得に不安を示したことが推察される。ただ、このことは生徒自身がこれまでの受身的な授業参加から抜け切れていないことへの裏返しとも言えよう。

「学習への動機づけ方策チェックリスト（社会科版）」作成の手がかりとして、A（注意）R（関連性）に関しては、「実際の社会の出来事」を「自分事」にできているか、その際生徒が協働性を発揮しているか、が重要な要点である。その一方、C（自信）S（満足）に関しては、自らの学習への関わり方や授業で作成したものへの出来映えに関する自己評価が重要であることがわかった。

## 主な引用・参考文献

- J. M. Keller 2010 学習意欲をデザインするーARCS モデルによるインストラクショナルデザインー北大路書房
- 中野靖弘 2015 小学校社会科における学習意欲を向上させるための指導の工夫ーARCS モデルの支援方略を計画的に取り入れることを通してー平成27年度広島市教育センター
- 鈴木克明 1995 「魅力ある教材」設計・開発の枠組みについてーARCS 動機づけモデルを中心にー教育メディア研究 vol.1 No.1 50-61